

ひとつ前の足跡

さいとうなおこ（未来）

お祝いの言葉に代えて、玉蜀黍の表紙が美味しそうな99号から好きな作品の感想を少し。

・帰り来て消毒スプレー自らにふりかけはじめ目を閉じながら 市川茂子

本来なら誰かがしてくれる消毒を独りゆえ自分にする。「目を閉じながら」がリアル。

・すいれんの今年の花をみたこととし半ばは終わるとおもう 小野澤繁雄

昨年までとは異なるこの世界、この世に咲く今年の「すいれん」は特別。吐息が聞こえる。

・身に覚えなきまま呼ばれる「ひいばあちゃん」代理を付けて先づは^{うべな}諾ふ 河村郁子

下の句がいい。自身への納得のさせ方がユーモラスで、作者の人柄が分かる。

・これ以後はわれ一人にて片づけむ写真の母はふつくらとして 布宮慈子

故人の内面に分け入るような遺品整理。ひとりだけで見た母のすがたが胸に沁みる。

・コル続く羽ばたき強き揚羽蝶 新野祐子

尾根の続くきつい場所で羽ばたく小さないのちの簡潔な必死さが見えてくる。

エッセイの「キルトの効用」（加藤文子）、「未知のコロナに翻弄されて」（神村ふじを）、それぞれとても読みごたえがありました。

祝「展景」100号

山形ゆ届けし「展景」月の夜半ほのかに甘き光を放つ さいとうなおこ

さいとうなおこ 一九四三年（昭和十八）、朝鮮生まれ。四五年、家族と共に福岡へ引き揚げる。七三年、歌誌「未来」に入会。近藤芳美に師事。現在、「未来」選者。歌集に『キンボウゲ通信』『シドニーは雨』『明日は霧と』『逆光』、著書に『子規はずっとここにいる』がある。埼玉県在住。